

『源氏物語』 右大臣家の四の君考

——大臣家の娘、そして北の方として——

河村 知加子

はじめに

光源氏と対立し、左大臣家と常に政権を争う右大臣家には六人の姫君がいる。その中でも特に三人の姫君、桐壺帝の女御であり朱雀帝の母后である長女・弘徽殿太后、その妹で頭中将（後の太政大臣）の北の方となる四女・四の君、そして朱雀帝の寵愛を一身に受けながら光源氏との情愛に溺れる六女・朧月夜は、三者三様の形で物語に深く関与していく。

ところでこれら三人の姫君を大臣家の姫君として見たとき、物語内でどのような役割を果たすのだろうか。本稿では、主要三姫君の中でも特に脚光を浴びることのない四の君に焦点を絞り、物語内での生き方、活かされ方をつぶさに探り、大臣家の娘、また北の方として、物語に果たす役割を考察していきたい。

一 大臣家の姫君時代

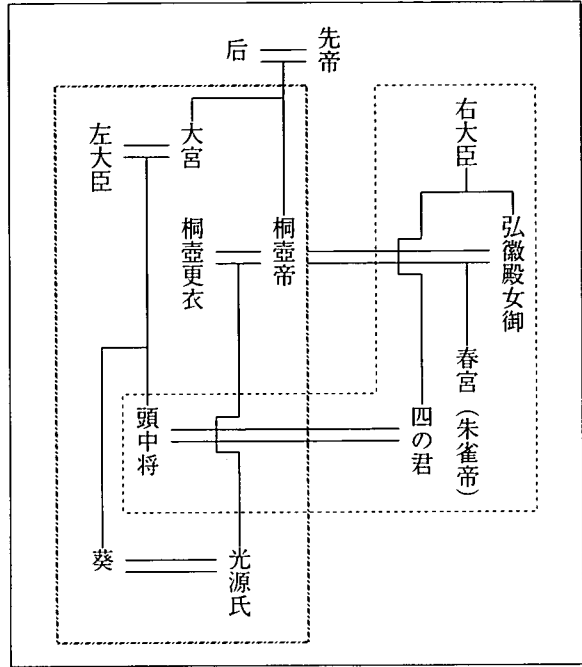
(1) 拮抗する左右大臣家

右大臣の四女・四の君は、左右両大臣が連立する桐壺帝治政下、つまり政治状況が色濃く反映された中でその存在が語り出される。よつてそこには、四の君が大臣家の娘として送らねばならぬ一生、言い換えるなら、責務・使命・役割なるものが集約されているのではないかと考えられる。そこで、左右大臣とその一族の権力構造を再度確認しながら、右大臣家内における四の君の立場を明らかにしてみたい。

この大臣の御おほえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、いづ方につけてもいとはなやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき右大臣の御勢ひは、ものにもあらずおされたまへり。御子どもあまた腹々にものしたまふ。宮の御腹は、藏人少将にていと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。

〔桐壺卷 四八頁〕⁽¹⁾

四の君の名が初めて語られるこの場面には、左右大臣の力関係が簡略に、かつ要を得て描かれている。左大臣は、桐壺帝から寄せられる信頼の厚さと、その帝と同后腹の大宮を正妻とすることによって、権門としての榮華を手に入れ、更には、帝最愛の皇子・光源氏を婿とすることで、帝との絆を深め、他家の追隨を許さない圧倒的支配力を得た。一方、次代の天皇を擁する右大臣は、国政の掌握を約束された「春宮の御祖父」の地位にありながらも、左大臣の榮華に物の数でもなく気圧され、劣勢を余儀なくされてしまふ。主導権争いに著しく遅れをとった右大臣は、何らかの目的を持ってだろう、娘四の君の婿として左大臣の嫡男・藏人少将（頭中將）を迎え入れ、娘にも劣らぬ世話をした。ここにおいて、左大臣と



ことありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御氣色賜らせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なめけるを、添臥にも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。

〔桐壺卷 四六頁〕

右大臣の有する権力構造は、桐壺帝の妹宮を正妻とする左大臣のそれとは異なる。娘の入内とそれに引き続く皇子の誕生、立坊そして即位までを視野に入れた、典型的な外戚政治の構造なのである。右大臣は、権力掌握の第一段階として娘・弘徽殿女御を桐壺帝の後宮に送り込み、一の皇子（朱雀帝）の誕生で第二段階を、次いで、皇子立坊で第三段階にまで昇り、外戚への道を着実に歩み始めていた。そして、次代の栄達が約束された今、現状の維持と更なる発展に向け、右大臣

光源氏、右大臣と頭中將の二つの関係は、「あらまほしき御あはひ」と、理想的な（婿―舅）像だと表現されている。しかし、その理想形の裏では、政権担当者たるべき両大臣の、政治家たる駆け引きが行なわれていたのである。

繰り返すが、左大臣が桐壺治世下で君臨できたのは、正室が帝の妹宮だからである。加えて、より鉄壁な権力基盤を築こうとする左大臣と、より強固な後見を源氏に与えようとする桐壺帝の思惑一致により、葵と源氏の婚姻関係は結ばれた。しかしその葵は、春宮（朱雀帝）妃にと望まれていた。

引入れの大い臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御氣色あるを、思しわづらふ

は新たな策を講じた。それは、桐壺治世下で主導権を握る左大臣を配下に置く、つまり、排除ではなく、接近・吸収という戦略であった。具体的には、左大臣の一人娘を、孫である春宮の妃とすることである。何故なら、春宮の後宮に組み込むことで、たとえ左大臣の娘が立后しようとも、皇子を産み、その皇子が即位しようとも、それは全て、右大臣のテリトリー内での出来事であつて、決して左大臣の権力に直結しないからである。しかし、この戦略は、右大臣に統率されるであらうことを鋭く見抜いた左大臣に阻まれ、海の藻屑と消えてしまった。

拒絶された入内は、右大臣軽視であるばかりか、春宮軽視をも意味するものであり、現状発展はおろか、現状維持すら困難を極める。そこでこの危機的状況を打破すべく、左大臣の嫡男・頭中将が四の君の婿として迎え入れられた。〈桐壺帝―左大臣〉の強固な繋がりによって結ばれた〈源氏―葵〉の婚姻関係に対抗し、局面を乗り切る策として、〈頭中将―四の君〉の婚姻関係が成立させられたのだ。葵と源氏の後を追う形で、四の君の婚儀が行なわれたという時期的な面から見て、それは明らかなのである。

系図に示した枠は、左大臣が手中に収めた源氏に匹敵する人物、つまり、右大臣が、政敵左大臣の嫡男頭中将を手中に収めたことを示し、将来の見通しとして、左大臣家を別の角度から傘下に組み込むことを主眼としてのものであつた。この婚取りの類似の構図は、左右大臣家が微妙な権力の差を見せつつも、一步突出しよう、対等に並び立とうとすることを意味していたのである。内実の異なる権力構造と、娘婿を巡る類似構図で構築されたこの場面は、「四の君」という存在なしには決して語れないし、両家の拮抗する様をも描き出すことはできなかつたであらう。「四の君」の存在は、左右両大臣家を繋ぎ止める紐帯であつた。

(2) 語られる人物像

四の君は大臣の娘として大切に養育され、左右大臣家を繋ぎ止める重要な役割を担っていた。その点で、娘への「かし

づき」が、そのまま婿への「かしづき」に置換されることは述べるまでもなく、左大臣の源氏に対する厚遇に比べても遜色のないものであった。ところが、頭中将を自身方に引き寄せ、一族内に吸収しようとした右大臣の思惑を余所に、肝心の頭中将の通いは稀でしかなかった。物語内には、その原因となった事情は一切記されていないが、ここでは、四の君への通いが稀である理由を探り出すことで、表に現れることのない四の君像へと迫ってみたい。

右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処は、この君もいとものうくして、すぎがましきあだ人なり。

〔帯木卷 五四頁〕

まず「住み処」の語は、意味の上では、四の君自身を指しているが、特に名指ししていないことから、四の君本人という断定を避ける、というよりはむしろ、その背後に控えている右大臣一家を意識してのものと思われる。とするなら、頭中将は妻方全体に対して「いとものうく」感じていたことになる。だが、頭中将の気持ちとは裏腹に、以前にも増して娘の世話を焼く右大臣は、当然の如く、婿の世話にも力を入れたであろう。具体的な描写場面はないが、「この君も」の「も」に焦点を当てることで次の推測が可能となる。

この直前の場面に、源氏に対する左大臣の心情が、「いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれ：」（帯木卷 五五頁）と吐露され、娘に深い愛情が注がれないことを不満に感じずにはいられない、そんな姿が描かれている。その流れの中で語り出された場面であることから、この「も」は、源氏の置かれた立場、状況と同様のこととが、頭中将にも当てはまることを暗示する語なのである。

続いて、この語を手がかりに、頭中将と右大臣、頭中将と四の君の関係が如何なるものであったかを、源氏と左大臣、源氏と葵の関係から浮き彫りにしてみよう。

元服してまだ日も浅い源氏は、常に帝に近侍し、藤壺への思いに心を奪われていたため、左大臣邸に里下がりすることままならない。しかし左大臣は、まだ幼い年頃だから仕方ないと、源氏を咎め立てしないばかりか、「いとなみかしづ

さきこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを選びととのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほな思しいたつく。〔桐壺卷 四九頁〕と殊更な待遇をし、装束なども、「よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひ。」〔桐壺卷 五四頁〕と、美麗の限りを尽くし、源氏を振り向かせようとした。だが、源氏の気持ちには動かなかった。それは、次に示す源氏の心情からも明らかである。

心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおおしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、：

〔桐壺卷 四九頁〕

妻である葵を、深窓の麗人と認めながらも、藤壺への思い故に心は葵に向くことはなく、比較の対象にもならない、気位の高い、情の移らない姫とさえ感じられてしまうのである。

左右大臣家の婚取りの類似構図と、「も」の内包する意味の両面から考えた時、頭中将と右大臣、頭中将と四の君の関係は、源氏と左大臣、源氏と葵の関係、在り方に置き換えが可能なのである。頭中将が四の君に対して「いとものう」い感情を抱いたのは、「心にもつかず」思われたためであつて、妻が政敵である右大臣の娘だからではない。何故なら、当帝桐壺鐘愛の皇子・源氏、当代左大臣の本妻腹嫡男・頭中将の両者には、現時点において後見の必要が全くないからである。源氏にとっての後見左大臣、頭中将にとっての後見右大臣は、桐壺朝下においては単なる形式でしかあり得ない。まして時の政治家である左大臣を父に持つ頭中将には、政敵の後ろ楯など無用であつた。

ではどうして、「心にもつかず」思われたのだろうか。その答えは雨夜の品定めにあつた。

⑦かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、この見たまふるわたりより、情けなくうたであることなむさるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。

〔帚木卷 八二頁〕

「なにがしは、痴者の物語をせむ」〔帚木卷 八一頁〕と言つて語り始められた、頭中将の体験談の一部である。稀な

がらも、密かに逢瀬を重ねていた女（夕顔）のもとに、妻のあたりから思いやりのない言葉・仕打ちが向けられ、後にその事実を知ったというのである。頭中将は当事者の名譽のためか、具体名への言及を避けているが、「見たまふるわたり」が四の君方であることは、頭中将の敬語の使用から明白である。四の君本人が行動を起こしたとするには無理があるが、右大臣の娘を妻としながらどが不服かという、右大臣方の不満が大いに込められていたといえよう。

④頭中将なん、まだ少将にものしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ参で来しに：

〔夕顔卷 一八五頁〕

⑦が四の君方の態度であるならば、①はそれをされた夕顔方の反応である。一つの事柄を別の角度から見ること、その内実がより鮮明になる。夕顔は、社会に公表も認知もされていない秘密の妻でしかなかつたにもかかわらず、粗略に扱われたと感じた四の君方は、これを排除しようと、あらゆる手段を講じ、ついに追いやってしまったのである。女の突然の失踪の理由を後になって知った頭中将は、思いやりのないその高慢さに、次第に通いが稀になっていったと考えられるのである。源氏の敵（仇）と位置づけられた姉・弘徽殿太后と同様の気性の強さが見て取れるのである。

(3) 当初の養育目的

ところで、これまで左右大臣家の勢力拮抗下での四の君の登場、そして夫頭中将による評価と彼女自身の行動から浮かびあがる人物像を見てきたが、ここで「四の君は源氏の北の方にと用意された姫君である」との仮説を立て、四の君に与えられていた、用意されていたであろう役割の一端に切り込んでみたいと思う。

では、仮説の立証から始める。まず根拠の一つとして、右大臣姉妹の美貌性を挙げる。

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡りせたまふ御方はえ恥ぢあへたまはず、いづれの御方も、我人に劣らむと思いたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うちおとなびたまへる…

〔桐壺卷 四三頁〕

右大臣の長女である弘徽殿女御の容姿は、源氏が御簾の内を許されていた幼い頃に、源氏の目によって既に確認されている。弘徽殿女御は、その出自、後見、第一皇子の生母であることから、桐壺帝も一目置かねばならない女御であった。そのため、帝は弘徽殿女御のもとに頻繁に足を運んだものと思われる。それ故、常に帝に付き随っていた源氏にも、その姿を目にする機会があつたはずである。幾分か年齢はかさんでいるけれども、どの方も大変美しく、申し分のない姿だと、幼少の源氏は判定を下した。

それから数年の歲月の後、花宴で偶然ながら朧月夜と一夜を共にした源氏は、弘徽殿女御の妹君であろうと想像を巡らしながら、美しい人であつたとの感想を漏らし、右大臣の姫君論へと話を展開させてゆく。

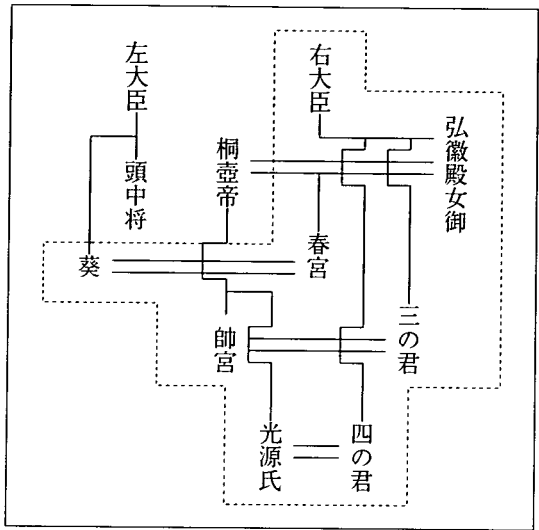
をかきかりつる人のさまかな。女御の御妹たちにこそはあらめ、まだ世に馴れぬは五六の君ならんかし、帥宮の北の方、頭中将のすさめぬ四の君などこそよしと聞きしか：

〔花宴卷 三五八頁〕

帥宮も頭中将も源氏とは親しい間柄なので、その妻の容姿容貌などを、直接ではないにしろ、世間話程度に聞き及ぶこともあつたらう。気性の程はともかく、右大臣の姫君方は、かなりの美貌の持ち主なのである。

第二に、右大臣の姫君達とその婿君達の年齢関係を根拠とする。源氏の弟・帥宮（後の螢兵部卿宮）の北の方は、右大臣の三の君（二）であり、年齢的に釣り合いが取れての婚姻成立と思われる。三の君が帥宮より年長であつたとしても、四の君は三の君より少なくとも一歳は年少なので、帥宮の兄である源氏とも釣り合いが取れることになる。また頭中将と四の君夫妻にしても、政略的な面は別として、年齢的に無理がないため婚姻が成立したと考えられる。葵が源氏より四歳年長（「四年ばかりがこのかみにおはすれば……」〔紅葉賀卷 三三三頁〕）であることから、源氏は葵の兄の頭中将より少なくとも五歳は年少、或いは、葵が頭中将の姉であつたとしても、源氏と頭中将はほぼ同年齢ということになる。因つてどちらの關係から見ても、源氏と四の君の婚姻年齢に問題はないと言える。

そして最も有力な根拠は、婿取りにある。これが第三である。右大臣が春宮（朱雀帝）の後宮へ左大臣の娘を入内させ



(右大臣の展望図)

政敵の排除より吸収を基本方針とした右大臣は、先を見通し、源氏の添臥にすべく、年齢の適合するであろう四の君をことさら大切にかしづいていたと考えられるのである。右大臣が桐壺帝との繋がりを、その血縁者を得ることに求めたのは、帥宮と三の君との婚姻（花宴巻 三五八頁）初出）からも窺い知ることが出来よう。四の君が、源氏の北の方になるべくして育てられた姫君である可能性は十分にある。

(4) 名に負う存在価値

る計画、これが何を意味するのか。再度述べるが、桐壺帝の信任厚い左大臣の抑圧を目的としたものであった、がしかし、左大臣の娘と源氏の婚姻成立によりあえなく却下される。そのため、劣勢に下った右大臣は、左大臣の嫡男を婿取りすることで、左右大臣家の均衡を保とうとした。では右大臣の当初の計画はどのようなものだったのか。

次代（朱雀朝下）で左大臣方を吸収し、支配下に置くために、春宮の後宮に左大臣の秘蔵娘を入内させる。すると、源氏の元服に伴う添臥は左大臣には存在しなくなり、その左大臣家の家格に対抗できるのは右大臣家のみ。したがって、必然的に右大臣の娘が添臥の候補に挙がる。右大臣は、手塩にかけて養育した四の君を、桐壺帝鐘愛の源氏に添臥として差し出すことで、大宮を媒介とした、桐壺帝と左大臣のような密接な関係を造り上げることが可能なのである。以上が図に示したシミュレーションである。

御子どもは、いづれともなく、人柄めやすく世に用ゐられて、心地よげにもしたまひしを、こよなうしづまりて、三位中将なども、世を思ひ沈めるさまよなし。かの四の君をも、なほ離れ離れにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婚の中にも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。

〔賢木卷 一三九頁〕

桐壺院の崩御（賢木卷 九七頁）により、世の中は一変する。天下の重鎮であつた左大臣は辞表を提出し、重用された子息達も消沈の色を隠し切れない。政治の実権は朱雀帝の外戚である右大臣一族が掌握した。そのような中、頭中将は以前と少しも変わることもなく、「なほ」途絶えがちに四の君のもとに通う。政權担当者が実父左大臣から義父右大臣に移行しようとも、頭中将は一向に行動を改めない、足繁く通うつもりなど毛頭ないのである。その時世の変化に逆らう態度が右大臣の癪に触れたのだから、右大臣の娘婿であるにもかかわらず、「このたびの司召にも漏れ」てしまう。しかし、頭中将は世間の動向に失望しながらも、昇進の選に漏れたことを気に止める様子すらない。何故か。それは頭中将の正妻が右大臣の四の君だからである。訪問が稀であろうが、頻繁であろうが、さしたる問題ではなく、重要なのは、右大臣の四の君が正妻である、の一点に尽きる。右大臣が左大臣家との均衡を保つために頭中将を四の君の婿とした、頭中将はそれを逆手に取つたのである。妻として厚遇することはないにしろ、〈妻―夫〉の関係が成立し継統される限り、〈舅―婿〉の関係もまたしかり。結局のところ、どれ程右大臣の癪に触れ、政敵としての扱ひを受けようが昇進が止まる程度であつて源氏のように政界から追放されることはない。つまり、右大臣の婿である以上、離縁しない限り、決して見限られることはないということなのである。頭中将は左大臣家の嫡男である誇りを持し、また強調することで立場の違いを明確にしなからず、四の君を楯とすることで右大臣に對峙してしたのである。「四の君」の存在は、右大臣だけではなく、頭中将にとつても、必要以上に重い価値を持つものであつた。

絶え絶えであつた二人の仲に、二人の男の子がいることが語られる。

中將の御子の、今年をはじめて殿上する、八つ九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするをうつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる奇せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、高砂を出だしてうたふいとうつくし。

〔賢木卷 一四一頁〕

今年初めて童殿上する二郎君は、正妻腹ということと世間の期待も大きく、時流に乗った、今を時めく右大臣の孫「四の君腹」であることが強調されている。「中將の御子」であり、同時に左大臣の孫でもあるのだが、その面が前面に押し出されることはない。四の君はその名に右大臣家を背負った存在として語られている。

(5) 左大臣方への吸収

一家の中樞である父太政大臣（右大臣）の薨去、姉弘徽殿太后の発病、そして右大臣家の権力の象徴、拠所であった朱雀帝の俄かな讓位〔濡標卷 二八二頁〕と、目まぐるしい流転の渦に巻き込まれるように、四の君の立場も急速に変化していった。

世の中すさまじきにより、かつは籠りぬたまひしを、とり返しはなやぎたまへば、御子どもなど沈むやうにものしたまへるを、みな浮かびたまふ。とりわきて宰相中將、権中納言になりたまふ。かの四の君の御腹の姫君十二になりたまふを、内裏に参らせむとかしづきたまふ。かの高砂うたひし君も、かうぶりせさせていと思ふさまなり。

〔濡標卷 二八三頁〕

右大臣方が権力を振るう朱雀朝下で引きこもっていた致仕の大臣（左大臣）は、太政大臣に就任し、源氏と共に冷泉帝の補佐を勤めた。不遇な時世を乗り越え、左大臣一家は復活を遂げた。そしてその復活は、四の君の実家である右大臣家の衰退と引き換えに成されたものであった。このような政権交代の中、二人の間に姫君の存在していることが語られる。

二郎君が紹介された時のように、この姫君もまた右大臣の血筋を引く「四の君の御腹」であることが確認される。しかし四の君にはもはや頼るべき親はなく、父右大臣の政敵であった左大臣家の世話になるしか道が残されていないかった。「か」には、朱雀帝の次代を謳歌した大臣家も、今では衰退の一途を辿る、誇れるはその血筋のみ、そんな意味合いが込められているのかもしれない。

選択肢を持たない四の君は、子供の養育、取り分け、姫君の養育に力を注ぐことで、夫権中納言（頭中将）と姫君立后の目的を共有し、実現に向けて歩みを共にし始めた。利害一致による者の同盟であった。

二人は共通目的に向けて着々と準備を進めた。まずは入内である。

権中納言の御むすめ、その八月に参らせたまふ。祖父殿あたちて、儀式などいとあらまほし。〔濔標卷 三〇一頁〕

権中納言の御むすめは、弘徽殿女御と聞こゆ。大殿の御子にて、いとよそほしうもてかしづきたまふ。〔濔標卷 三二一頁〕

「四の君の御腹」であると語り出された姫君は、「権中納言の御むすめ」という新たな位置づけを得る。入内に際しては、権中納言（頭中将）の父太政大臣が采配を振るい、盛大な儀式を行った。四の君腹である以上、太政大臣（左大臣）の孫娘であると同時に、右大臣の孫娘でもあるのだが、右大臣は既に他界しており、叔母に当たる弘徽殿太后も、冷泉朝下において源氏に圧倒され発言権を失ってしまった。「うきものは世なりけり……」〔濔標卷 三〇一頁〕と身の不運を嘆くばかりの太后に、姪の入内に力添えする力も意志も感じられない。それは、姪が既に右大臣方の流れを汲む者ではないことを承知していたからである。太政大臣が率先して入内の儀式を執り行なったのは、姫君が左大臣方の流れを汲む者、つまり、左大臣方の権力象徴であることを世間に公表するためであった。

そして引き続き時の重鎮の後見を得て、姫君は「弘徽殿女御」となる。桐壺帝の弘徽殿太后から朱雀帝の朧月夜へと受け継がれた、右大臣家の権力の証とも言うべき殿舎「弘徽殿」は、新たな姫君の住まいとなる。では、弘徽殿太后を姉に

持つ四の君の關係で、後宮一、格の高い殿舎を手にする事ができたのだろうか。確かに、四の君から繋がる血筋で、「權中納言家は右大臣家の一部を繼承⁽³⁾」したのかも知れない。しかし、大后の發言力の無さ、現太政大臣の猛威からすると、「弘徽殿」が右大臣方から奪取した権力の証であることは否めないのである。その殿舎に太政大臣が後見する姫君が入ることで、左大臣方の吸収を目論んでいた右大臣は、逆に左大臣によって吸収されてしまう。目的と結果が逆転するという皮肉な形で結着してしまつたのだ。そして、右大臣の血を繼ぐ四の君もまた、弘徽殿女御の母であることによつて、左大臣方への吸収を余儀なくされたのである。

二 大臣家の北の方時代

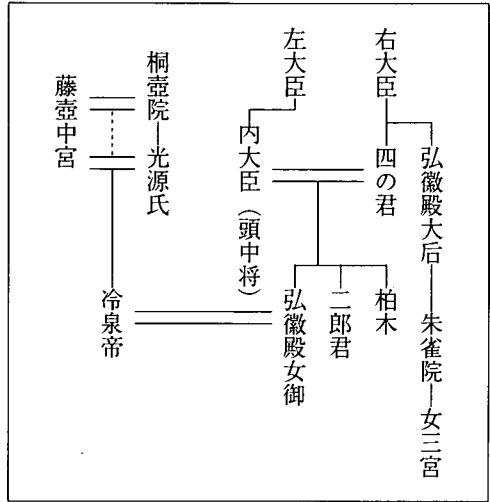
(1) 内大臣北の方としての再登場

弘徽殿女御の入内を最後に物語内から姿を消していた四の君は、齋宮女御（秋好中宮）の立后後、内大臣（頭中将）の「北の方」という地位を確立した人物として再登場する。今後、右大臣の娘であることを意味する「四の君」の呼称が付されることはない。

大臣はそのまま参りたまはず、宮をいとつらしと思ひきこえたまふ。北の方には、かかることなんと、気色も見せたまつりたまはず。

〔少女巻 五一頁〕

内大臣は、娘の弘徽殿女御が立后に敗れてしまい、その後の後宮対策として次女の雲井雁を春宮に奉ろうと思案していたが、夕霧との仲に気づき愕然とする。だが北の方にはその素振りさえ見せない。実子の立后を果たせなかつた今、余計な物思いをさせたくないとの配慮だつたのだろう。子供を中心に据えて、二人の關係は好転しているようである。目的を共有した結果であらうし、協力体制は依然続く。



太政大臣も、「この衛門督の、今まで独りのみありて、皇女たちならずは得じ、と思へるを、かかる御定めども出で来たなるをりに、さやうにもおもむけたてまつりて、召し寄せられたらん時、いかばかりわがためにも面目ありてうれしからむ」と思しのためひて、尚侍の君には、かの姉北の方して、伝へ申したまふなりけり。

〔若菜上巻 三七頁〕

源氏の齋宮女御（秋好中宮）立后は、弘徽殿女御を擁する太政大臣方の冷泉朝での劣勢・敗北を決定づけたことになる。そこで、あくまでも源氏と対等であろうとする太政大臣（頭中將）は、朱雀院鐘愛の皇女・女三宮の獲得に乗り出した。桐壺帝の最愛の皇子・源氏を婿として迎え入れ、力を得た父左大臣のような緊密な関係を息子柏木に結ばせることで、次世代での繁栄を勝ち取ろうと願ったのだ。そのため利用できるものは利用する。他に先行する手段、朱雀院に直接懇願できる手段は、まさに北の方にあった。「皇女たちならずは得じ」とする我子の為に、そして己の「面目」のために、かつての「四の君」の血の系譜を辿ったのである。

(2) 二人一組の夫婦

太政大臣と北の方の子供に対する熱意の程は、二郎君（後の紅梅大納言）の元服、又、弘徽殿女御の入内、そして柏木の正妻に皇女・女三宮を得ようと奔走した姿に如実に現れている。結果として、娘弘徽殿女御の立后に夢敗れ、女三宮の降嫁も実現されることはなかったが、それらの行動なり働きかけは、夫太政大臣（頭中將）一人の力で成しえたものでは

なく、その北の方(四の君)との協力・提携の上に成り立ったものであった。父右大臣と舅左大臣との間に交わされた政略結婚は、幾年もの間、二人の間に不和という名の冷たい風を巻き起こしていた。しかし、子供を媒介とし、自身等を基盤とする家の発展を願うことで、二人の冷戦関係は解かれ、人生の歩みを共にすることになったのである。

女三宮と不義密通を犯し、源氏への畏怖と、罪の意識から病臥する息子柏木に関連する場面以降には、その様子が顕著に表れており、そこにはある一つの特徴が見られる。それは息子柏木に対して、常に「大臣―北の方」と二人一組、つまりワンセットで登場することである。次に全七箇所を列挙する。

①心地かき乱りてたへがたければ、まだ事もはてぬにまかだたまひぬるままに、いといたくまどひて―中略―しばしの酔ひのまどひにもあらざりけり。やがて、いといたくわづらひたまふ。大臣、母北の方の思し騒ぎて、よそよそにていとおぼつかなしとて、殿に渡したてまつりたまふを、女宮の思したるさま、またいと心苦し。

〔若菜下巻 二八一頁〕

②衛門督の君、かくのみなやみわたりたまふことなほおこたらで、年も返りぬ。大臣、北の方思し嘆くさまを見たてまつる…

〔柏木巻 二八九頁〕

③いとど消え入るやうにしたまひて、むげに頼む方少なりたまひにたり。女宮のあはれにおぼえたまへば、ここに渡りたまはむことは、今さらに、軽々しきやうにもあらむを、上も大臣も、かくつと添ひおはすれば、おのづからとりはづして、見たてまつりたまふやうもあらむにあぢきなしと思して、「かの宮に、とかくしていま一たび参でむ」

〔柏木巻 三一一頁〕

④加持まある僧ども近う参り、上、大臣などおはし集まりて、人々もたち騒げば…

〔柏木巻 三二八頁〕

⑤大臣、北の方などは、まして言はむ方なく、我こそ先立たため、世のことわりなうつらいことと焦がれたまへど何のかひなし。

〔柏木巻 三一九頁〕

⑥父大臣、母北の方は、涙のいとまなく思し沈みて、はかなく過ぐる日数をも知りたまはず、御わざの法服、御装束、何くれのいそぎをも、君たち御方々とりどりになむせさせたまひける。経、仏のおきてなども、右大弁の君せさせたまふ。七日七日の御誦經などを、人の聞こえおどろかすにも、「我にな聞かせそ。かくいみじと思ひまどふに、なか道妨げにもこそ」とて、亡きやうに思しほれたり。
〔柏木巻 三二七頁〕

⑦大将の君も、事ども多くしたまひ、とりもちてねむごろに営みたまふ。か的一条宮をも、このほどの御心ざし深くとぶらひきこえたまふ。兄弟の君たちよりもまさりたる御心のほどを、いとかくは思ひきこえざりきと、大臣、上も喜びきこえたまふ。亡き後にも、世のおほえ重くものしたまひけるほどの見ゆるに、いみじうあたらしうのみ思し焦がるること尽きせず。
〔横笛巻 三四六頁〕

二人一組での初登場①では、源氏の痛烈な皮肉と視線によつて病を悪化させた最愛の息子柏木を憂慮する余り、その正妻である皇女・女二宮（落葉宮）の元から、柏木を半ば強引に引き取ってしまう。息子を手元に置いて看病したいという親の意向を前面に押し出したのである。しかし柏木の病は一向に回復する兆しもなく、女三宮との密事を知る由もない二人（両親）は、悲嘆の内に新年を迎えた②。柏木にとつて、唯一、生への執着の証であつた女三宮の俄かな出家に、落胆の色を隠し切れず、病状は悪化の一途を辿つた。息子の死期が近いことを悟ると、女二宮との対面も断固として許さない。一時として離れたくない、その一心に支配され、息子の懇願さえも拒否し、傍らに添ひ続けたのである③。いよいよ臨終間際となり④、柏木は夕霧に源氏との仲立ちと後事を託し、「泡の消え入るやうに」〔柏木巻 三一八頁〕この世を去つてしまふ。二人の嘆きは他に比すものとしてなく⑤、人目を憚ることなく放心状態に陥つてゆく⑥。やがて柏木の一周忌が巡り来るも、故人に寄せられる源氏の格別の供養、夕霧の女二宮に寄せられる故人の兄弟以上の誠意に感動すら覚え、我子の信望の高さと共に、悲しみを新たにするのであつた⑦。

以上のように、柏木を見守る太政大臣と北の方の二人は、息子の病状に一喜一憂する〈親〉という点ばかりがクローズ

アップされ、他者、例えば柏木の正妻の女二宮や、その母一条御息所への心情的配慮などは微塵も感じられず、寧ろ、〈親〉の立場を楯にとった、傲慢とも言うべき態度が読み取れるのである。この二名は、〈親〉であること以外には何も求められず、政治家である必要も、権勢家である必要もなかった。ただひとえに、悲嘆に沈む両親であることだけが求められたのである。ワンセットである必然性を以てして、両名の名は連ねられたのである。

(3) 発せられた言葉

「北の方」の名を付与され、その地位を不動のものとしたとき、「四の君」時代にはなかった言動が表面化する。柏木に対する愛情や期待の大きさが引金となったのだろう、発言は僅かに二箇所である。

女三宮との密通を源氏に察知され、恐怖に戦く柏木は、前場面①で述べたように、病を悪化させ、親許へ引き取られることになった。夫との別居を強いられた女二宮は、その高貴な身分故見舞いも儘ならず、夫の身を案じつつ、我身の行く末をも案じなければならなかった。女二宮の生母・御息所もまた、もとより降嫁に反対してただけに、宮の身を案じ、「世の事として、親をばなはさるものにおきたてまつりて、かかる御仲らひは、とあるをりもかかるをりも、離れたまはぬこそ例のことなれ、一中略ししばしここにたかくて試みたまへ」〔若菜下巻 二二二頁〕と、妻（女二宮）の下での養生を進めると母（四の君）から帰宅を促す言葉が届く。

母北の方うしろめたく思して、「などか、まづ見えむとは思ひたまふまじき。我は、心地もすこし例ならず心細き時は、あまたの中にまづとりわきて、ゆかしくも頼もしくもこそおぼえたまへ。かく、いとおぼつかなきこと」と恨みきこえたまふ……

〔若菜下巻 二二三頁〕

この母北の方（四の君）の初めての発言は、我が手元で看護したい、一刻も早く会いたいという、息子への深い固執（愛

着) そのものであった。皇女である正妻がその地位をかざして夫(柏木)を留めようとするのならば、母北の方は(親)である立場を笠に、息子(柏木)を連れ戻そうとした。一途な思い、抑え難い感情の発露として、この発言は位置づけられるのである。

回復の兆しはおろか、徐々に衰弱する柏木は、周囲の誰彼ともなく女二宮の世話を依頼し始める。父親や夕霧は勿論のこと、母親とて例外ではなかった。柏木の「かくて見棄てたてまつりぬなめりと思ふにつけては、さまざまにいとほしけれど、心より外なる命なれば、たへぬ契り恨めしうて、思し嘆かれむが心苦しきこと。御心ざしありてとぶらひものせさせたまへ」〔柏木巻 三二一頁〕との、遺言にも等しい切なる願いに対して、母北の方は、

「いで、あなゆゆし。後れたてまつりては、いくばく世に経べき身とて、かうまで行く先のことをばのたまふ」とて、泣きにのみ泣きたまへば……

〔柏木巻 三二二頁〕

と泣き崩れてしまい、柏木はそれ以上母に後事を頼むことも叶わず、弟の右大弁に子細を依頼する始末となる。死に向かう姿を受容できない母北の方は、息子の依頼(遺言)を拒否し、言葉を遮ることで、辛うじて自己の精神的安定を図つたと考えられる。

大臣家を継ぐに相応しい人物と評価を受ける最愛の息子を失う憤りが、頑なに守り続けられた沈黙を打ち破らせ、発言への道を開いたと見て間違いない。そして柏木に関しては、常に夫(太政大臣)とワンセットで登場していたにもかかわらず、この発言一箇所に限っては、相方(夫)を伴わない、単独での登場となっていることにも注目しておきたい。

おわりに

これまで四の君の生涯を、ほぼ時間軸に添って見てきた。右大臣家の姫君としては、政治的(駒)としての役割が強く、

その存在に、左右大臣家を繋ぎ止める働きが与えられていた。がしかし、〈駒〉であること以上の働きも、それ以下の働きも要求されてはいなかった。夫頭中将でさえ、右大臣家全盛期の朱雀朝下において、右大臣家と繋がる四の君を楯に政変を乗り切った。つまりは、己の保身に利用されたのであり、又しても、〈駒〉としてのみの存在しか必要とされなかったのである。そのため、一言の発言はおろか、僅かな動きさえも、全て他者の目を通して語られていたのであった。

しかし、左大臣家への吸収という形で、右大臣家から離脱せざるを得なかった四の君は、太政大臣の「北の方」という地位を確立したとき、〈駒〉であることから解放され、決して許されることのなかった発言が許されることになる。夫との連名は、それ自身が夫の〈駒〉であることからの解放を意味し、大臣家を外から支える者（夫）と対等の位置を占める、内から支える者（妻）としての地位の獲得をも意味する。なおかつ、夫から離れての単独の発言は、息子への思いにおさされてのものであるが、夫に依存するだけではないことも示している。

大臣家の姫君として負っていた責任は、四の君が左大臣方に吸収された時点で無効となり、後には妻そして、母親としての側面だけが残されてゆく。

「四の君」の名を棄て、大臣の「北の方」を貫き通した四の君の人生には、物語の主人公のような特有の形、すなわち波乱なるものも、華麗なるものも見られない。しかしながら、大臣の娘として、そして、大臣の妻として、さらには、将来の大臣たる可能性を宿した息子の母としての役割を、十分に生き切っていると見てよいであろう。それは平安貴族女性の典型を生き抜いた女性と言ってもよい。そしてこのように、時代の典型を生き通す存在があつてはじめて、その典型を逸脱して教奇な人生を生きる存在（主人公たち）の迫真性が保証されるのである。

注

- (1) 引用は全て新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）に拠る。なお、引用本文には適宜傍線を付し、下に巻名と頁数を記した。
- (2) 新編日本古典文学全集『源氏物語①』花宴巻・三五九頁の頭注一五に従い、帥宮の北の方を右大臣の三の君と定めた。
- (3) 三田村雅子『源氏物語―物語空間を読む』（平成9年1月20日 筑摩書房）

（博士前期課程二年）